

貿易統計から見た最近の水産物輸出の動向

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産大学校
	公開日: 2024-10-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En): Analysis; Change; Fishery products; Japan; Trade; Utilization
	作成者: 中里, 靖
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2011992

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



貿易統計から見た最近の水産物輸出の動向

中里 靖*

Recent trends in the exports of fishery products from "Trade statistics of Japan"

Yasushi Nakazato*

Abstract : The per capita consumption volume of fishery products has been decreasing since 1990 in Japan. And, the food consumption volume including fish in Japan will be expected to decrease with declining birth rate. Therefore, it is expected fish market volume in Japan will be shrinking. On the other hand, the global fish consumption volume is increasing. Then, the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries has been promoting to export the products by related industries in Japan as a way to stabilize their managements to widen their market abroad. Looking at recent fishery products export from Japan, both the volume and the value are increasing remarkably. I analyzed the changes about fishery products for food from statistics and showed the characteristics. And I described a trend in world fish utilization to influence Japanese fishery products export. In the results, a increase of the export volume in fish products (H.S.code 03) and a rise of the average price of exports in fish processed products(H. S.code 16.04,16.05) are remarkable, and the each change is occupied by relatively few items. An increase of export in some items is supposed to be influenced by a global trend in fishery products utilization.

Key words: Analysis, Change, Fishery products, Japan, Trade, Utilization, (__ は、ASFA)

はじめに

かつては、水産缶詰に代表される水産物を多くの輸出していた我が国水産業であるが、世界的な200海里体制の定着、円高の進展等を背景に輸出規模は縮小し、反面、水産物輸入は増大し、我が国は世界有数の水産物輸入国となった。

しかし、国内における水産物消費は、国民1人当たりの食用魚介類の年間供給量が1990年代以降減少傾向にあり、少子高齢化の進展により、今後とも水産物を含めた食料全体の消費量が減少し、それに伴い市場規模が縮減するとの

見方がある¹⁾。

他方、世界的には、人口の増加に加え、1990年代以降、中国、ロシア、インド、ブラジルをはじめとする新興国の台頭や、アジア地域を中心とした経済発展、先進国における健康志向などを背景に水産物消費量が増大している。

こうした国内外の事情を踏まえ、農林水産省でも国内の農林漁業者が安定した経営を維持するための市場として、海外市場にも目を向け、農林水産物の輸出促進を図るべく施策を推進している²⁾。

2000年以降の我が国の水産物輸出が、数量、金額ともに急激に増大している中で、特徴的な動向を示したシロザ

* 水産大学校水産流通経営学科 (Department of Fisheries Distribution and Management, National Fisheries University)

† 別刷り請求先 (corresponding author) : nakazato@fish-u.ac.jp

ケ、ナマコなど個別品目ごとには、佐野³⁾、日本銀行函館支店⁴⁾、廣田⁵⁾、耿ら⁶⁻⁷⁾、農林水産省⁸⁾によって、報告がなされているが、水産物輸出総体としての内部構成については、その動向分析がなされていない。このため、外需が我が国水産業の経営の安定、収益性の向上にどの程度寄与しうるのかを検討していく上で、まずは輸出増大の全体像を把握することが重要であると考え、最近の水産物輸出の増大について、食用の魚介類（HS 番号第 03 類）及びその加工品（HS 番号第 16.04 類、

第 16.05 類）に関し、貿易統計からその内容及び全体的な動向を分析した。また、併せて我が国の水産物輸出を取り巻く水産物利用の世界的動向について述べた。

なお、金額にかかる統計データについてのデフレートは行っていない。

1. 我が国の食用魚介類及びその加工品の輸出動向

我が国の水産物輸出は、1980 年代に、数量で 100 万トン近くにまで達し、金額で 3 千億円を超えることもあったが、その後、数量では 20 万トン、金額で 1 千億円程度まで減少した。一方、水産物輸入は、1990 年代まで急激に増加し、数量で 400 万トン、金額で 2 兆円近くに達した (Fig.1)。2000 年以降は、数量、金額とも圧倒的に輸入が多い状況は変わらないものの、輸入が減少傾向を示しているのに対し、輸出については、増加傾向にあり、2008 年及び 2009 年はリーマン・ショックによる世界経済の混乱や円高等の影響を受け落ち込み、2010 年には再び増加に転じている。

水産物の範疇には、主に食用に向けられる冷蔵、冷凍の魚介類、水産缶詰や練り製品といった水産加工品のほか、真珠や魚粉といった食用にはならない物品も含まれているが、以下、主に食用向けとなる水産物に限定し、輸出統計品目表第 3 類に分類される魚介類（以下、「3 類魚介類」

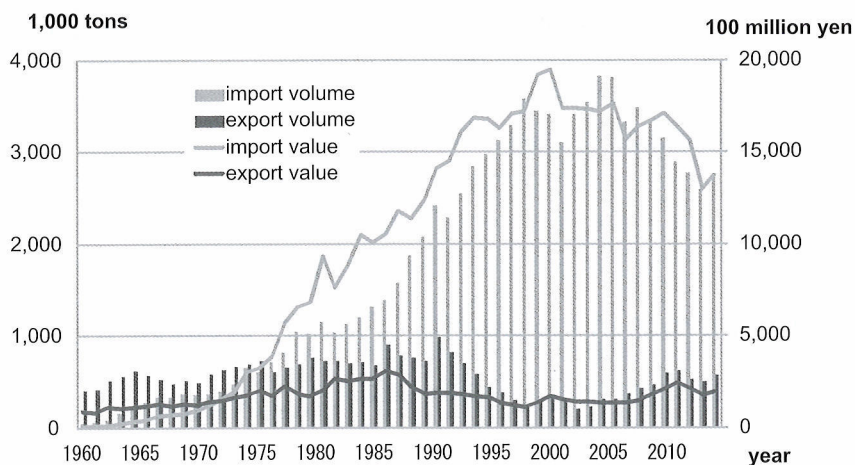


Fig.1 Changes in the trade volume and value of fishery products in Japan

Source: "Trade statistics of Japan" by Ministry of Finance (from "Fisheries of Japan" by Fisheries Agency)

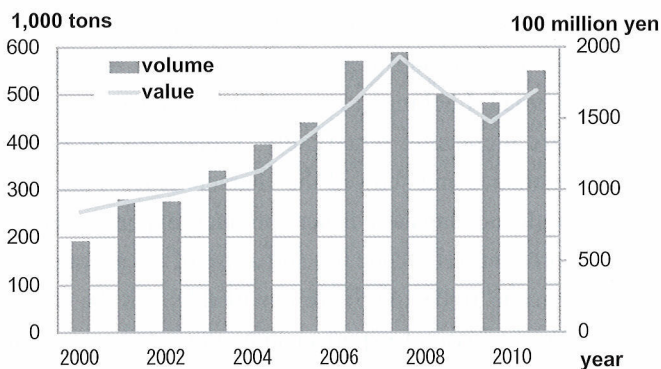


Fig.2: Changes in the export volume and value of fishery products for food (H.S.code 03 and 16.04, 16.05) since 2000

Source: "Trade statistics of Japan" by Ministry of Finance

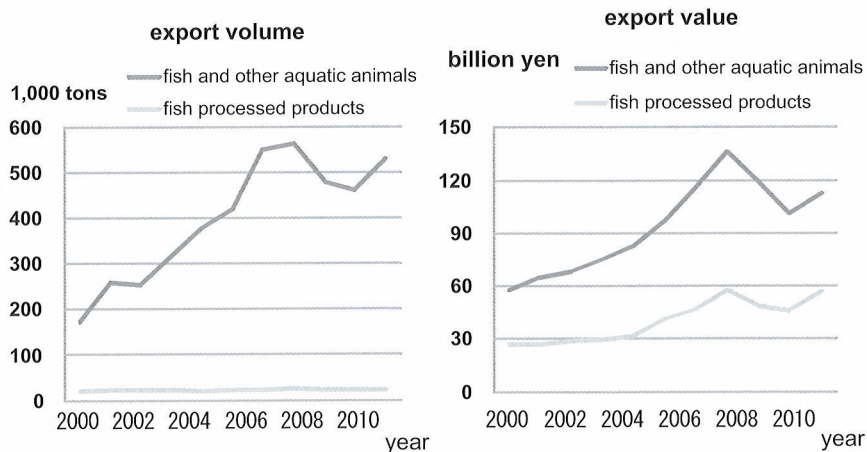


Fig.3 Changes in the export volume and value of fish and other aquatic animals (H.S.code 03) and fish processed products (H.S.code 16.04, 16.05)

Source: "Trade statistics of Japan" by Ministry of Finance

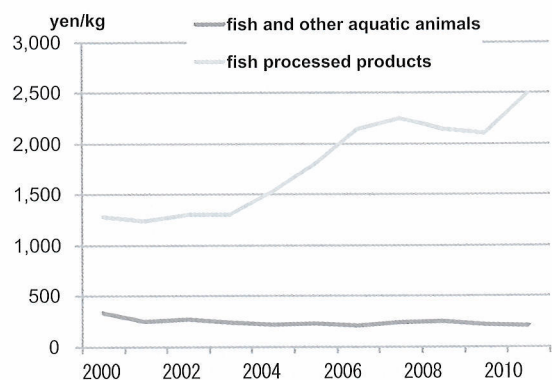


Fig.4 Changes in the average export price of fish and other aquatic animals (H.S. code 03) and fish processed products (H.S. code 16.04, 16.05)

Source: compiled from "Trade statistics of Japan" by Ministry of Finance

という。)、及び第 16 類の統計番号 16.04 及び 16.05 に分類される魚介類の加工品（以下、「16 類加工品」という。）に着目して分析を行い、その構成変化の把握に努めた。なお、2010 年の水産物輸出全体に占める 3 類魚介類と 16 類加工品を併せたシェアは、数量で 97%、金額で 86%となっている。

主に食用向けとなる 3 類魚介類と 16 類加工品を併せた輸出数量及び金額の推移を示したのが、Fig.2 である。輸出数量、金額とも同様な推移を示している。

次に、3 類魚介類、16 類加工品の各々について、輸出量及び輸出金額を比較したものが、Fig.3 である。輸出量では、3 類魚介類が著しい増加傾向にあるのに対し、16 類加工品に増加傾向は認められないが、輸出金額では、3 類魚介類、16 類加工品とも増加傾向が認められる。

さらに、輸出金額を輸出量で除し、輸出の平均単価の変化を見たのが、Fig.4 である。3 類魚介類の単価が横ばいあるいは低下傾向にあるのに対し、16 類加工品の単価は

上昇傾向を示している。

以上のことから、3 類魚介類では、輸出数量の増加により輸出金額も増加させてきたのに対し、16 類加工品では輸出数量ではなく、平均単価の上昇が輸出金額増加に寄与している。

2. 3 類魚介類の輸出動向の分析

1. で述べたように 3 類魚介類の輸出においては、数量の増加が特徴的であることから、統計の連続に留意しつつ、品目ごとに、2010 年と 2000 年の輸出量を比較するとともに、増加幅が大きな品目と全体の輸出量の推移をみた (Fig.5)。

この間の 3 類魚介類全体では 35 万 5 千トンの増加となっているが、1 万トン以上増加した品目は、冷凍のサバ（マサバ及びゴマサバ）、シロザケ等（ベニザケ以外の太平洋サケ）、冷凍のサンマ、冷凍のカツオ、冷凍のスルメイカ等であり、これら 5 品目の増加分は全体の 8 割以上を占めている。（冷凍のスケトウダラについては、2001 年以前は多くの雑多な冷凍魚の中に区分され、2000 年と 2010 年との比較が困難である。）

さらに、冷凍のサバ、冷凍のシロザケ等、冷凍のサンマの上位 3 品目に限っても全体の増加分の 6 割以上を占めており、1. でみた 3 類魚介類輸出量の著しい増加傾向はこれらの上位品目の輸出動向によるところが大きい。

3. 16 類加工品の輸出動向の分析

1. で述べたように、16 類加工品の全体の輸出においては、数量は横ばいで推移しているのに対し、金額は顕著な増加傾向にあることから、統計の連続に留意しつつ、品目ごとに、2010 年と 2000 年の輸出金額を比較するとともに、その間の推移をみた (Fig.6)。

その結果、16 類加工品全体では輸出金額は 296 億円の増加となっているが、10 億円以上増加した品目は、干しナマコ等の水産無脊椎動物の調整品（甲殻類及び気密容器入りのものを除く。2004 年から干しナマコは統計区分が分離）、貝柱調整品、かまぼこその他練り製品の 3 品目で、これらで全体の増加分の 9 割以上を占めており、特に干しナマコを含む水産無脊椎動物の調整品が顕著な伸長をみせている。

4. 最近の水産物輸出を特徴付けている品目の輸出先

ともに食用水産物である 3 類魚介類と 16 類加工品であるが、最近 10 年の輸出動向は、3 類が数量の増加が顕著

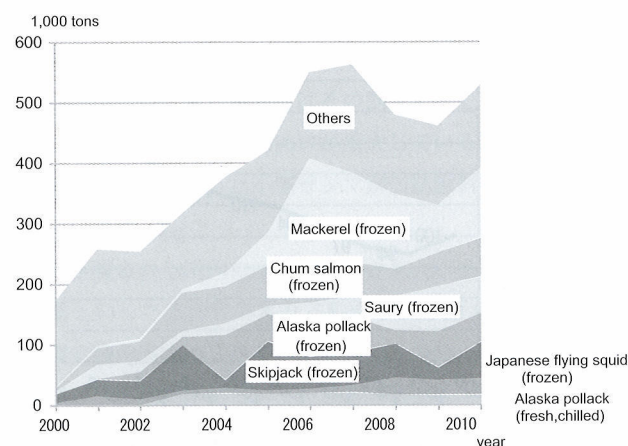


Fig.5 Changes in the export volume of fish and other aquatic animals (H.S. code 03) by major item

Source: "Trade Statistics of Japan" by Ministry of Finance

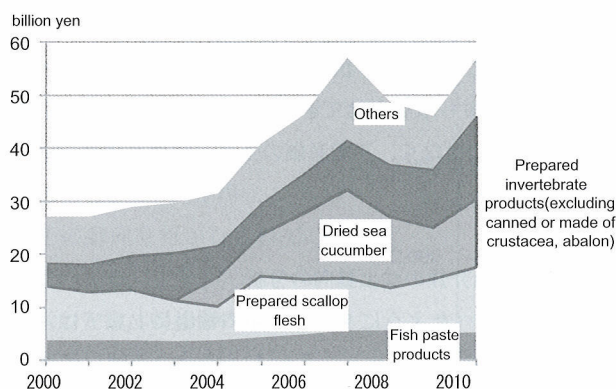


Fig.6 Changes in the export value of fish processed products (H.S. code 16.04, 16.05) by major item

Source: "Trade Statistics of Japan" by Ministry of Finance

であるのに対し、16類は金額が増加するなどの特徴は異なるが、いずれもその動向に影響を与えているのは比較的少数の品目である。

これらの品目について2010年の輸出先をみると、3類魚介類では、最も輸出量が増加した冷凍のサバは、その3分の1がエジプトであり、これにタイ、中国、インドネシアが続き、これら4カ国で約7割を占める。シロザケ等及びサンマはそれぞれ中国、ロシアが8割以上を占め、サンマはロシアのみで8割に達するなど輸出の多くは一部の国に限られている (Fig.7)。また、16類加工品では、干しナマコ等の水産無脊椎動物の調整品 (2004年から干しナマコは統計区分が分離) の輸出金額の9割が香港を主体とする中国、貝柱調整品 (主にホタテ貝の干し貝柱) も4分の3

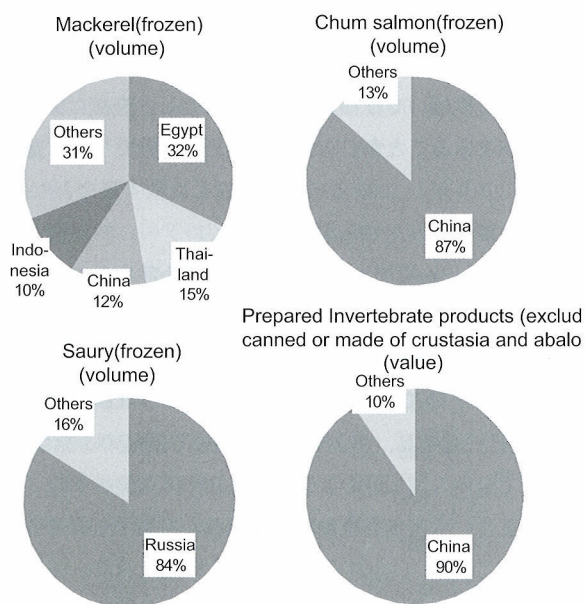


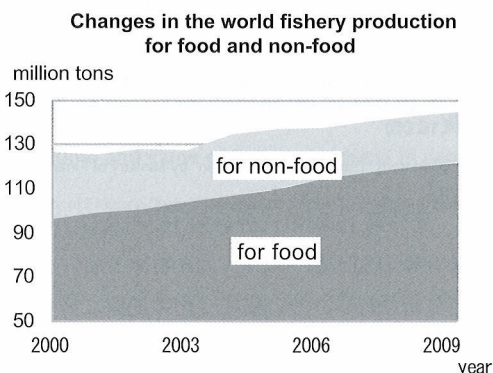
Fig.7 Share in the export destination by symbolic item characterizing fishery products export in 2010

Source: "Trade statistics of Japan" by Ministry of Finance

が同様に香港を主体とする中国となっている。このように16類加工品でも最近の輸出を特徴付けている品目の輸出先は中国に偏重していることが分かる。

5. 水産物利用及び取引における世界的な潮流

世界的に水産物需要が高まっているとされているが、FAO統計により2000年以降の世界の漁業生産の用途別仕向量をみたのが、Fig.8である。漁業生産量は増加傾向が



Changes in the share of utilization for food and non-food in world fishery production

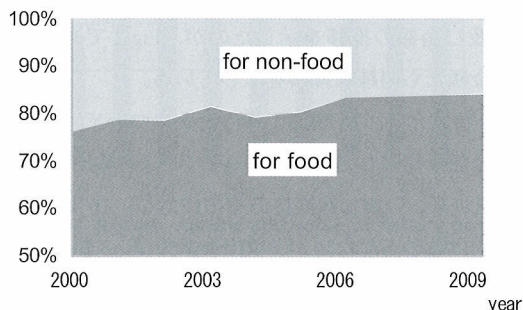


Fig.8 Changes in the World fishery production for food and non-food and the share

Source: FAO

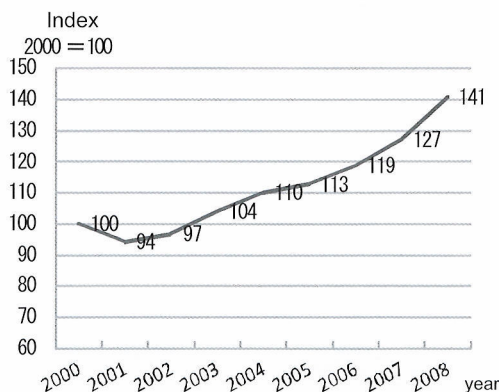


Fig.9 Changes in the index of average import price of fishery products (2000 year=100)

Source: compiled from "FISHSTATJ" by FAO

続いているが、とりわけ食用への仕向けが増大し、その割合が高まっているのが分かる。また、非食用は、その割合のみならず仕向け量自体が減少しており、2000年に3千万トン近かった仕向け量は、2009年では2千3百万トン弱まで低下するなど2割以上減少している。

一方、水産物の貿易量は増加傾向が続いており、国際的な取引は拡大傾向にあるが、その輸入平均価格（総輸入金額（ドルベース）を総輸入量で除したもの）の推移をみると、2000年を100とした場合の輸入価格は、2008年には141にまで上昇している（Fig.9）。

このように、世界的には特に水産物の食用需要が強まり、非食用向けの減少と食用向けの増加といった変化を伴いつつ、水産物取引全体は拡大基調で推移しており、その平均価格は大きく上昇している。

6. 最近の輸出増大に対する評価と今後の取組

我が国の食用水産物の輸出は増大傾向にあるが、統計区分ごとにその動向をみると、3類魚介類では数量の増加が顕著であるのに対し、16類加工品は平均単価の上昇により金額が増加するなどその特徴は異なる。しかし、これらの傾向を特徴づけているのは、比較的少ない品目の動向である。

世界的に水産物需要の拡大基調が続く中で、2011年は、東日本大震災による産地機能の喪失、諸外国による日本産食品の輸入拒否や安全性検査の義務付け（13）、歴史的円高のほか、欧州の通貨危機や中東の政情不安など、我が国の食用水産物輸出を減退させる多くの要因が生じ、1～11月の累計でみると、数量で25%、金額で11%前年実績を下回っている。しかしながら、世界的な人口増加、世界経済の拡大、魚食志向の高まりなどを背景に中長期的には水産物需要の増大が続くと予想される。

世界の漁業生産量は増加しているものの、その利用動向には変化がみられ、非食用向けはその割合とともに仕向け量が減少する一方で、食用仕向けが増大している。国内でも、養殖餌料向けであった小型サンマが缶詰原料として輸出されている（14）。

縮減が示唆される国内の水産物需要と拡大が進む海外水産物需要といった方向性の異なる動向予測を踏まえれば、経営基盤の強化が求められている漁業者を含めた我が国水産関係者は、水産物供給といった役割を果たしていくために、外需の取り込みに向けた販路拡大のための輸出を経営戦略の1つの選択肢として念頭に置くことは重要であると考え。また、それを具現化していくためには、政府の施策

の活用を含め、多方面から海外の水産物需要の動向の把握と情報収集に努めていくことが必要であろう。

参考文献

- 2) 水産庁：水産白書。 http://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h22_h/index.html
- 2) 農林水産省：農林水産物・食品の輸出促進対策の概要。 http://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/e_intro/pdf/taisaku_201106.pdf
- 3) 佐野雅昭：北海道におけるアキサケ輸出拡大の内実。漁業経済研究，53(2)，43-66，(2008)
- 4) 日本銀行函館支店：最近の水産物の輸出急増とその背景。金融経済トピックス)，1-6，(2005)
- 5) 廣田将仁：沿岸地域商材における輸出拡大の現状 - 海外需要の増大に要請された陸奥湾産ナマコ供給体制の検討 -。漁業経済研究，53(2)，21-41，(2008)
- 6) 耿瑞、佐野雅昭、久賀みず保：中国ナマコ加工産業の発展と企業行動 - 大連市を事例として -。漁業経済研究，49(2)，1-20，(2009)
- 7) 耿瑞、佐野雅昭、久賀みず保：水産物輸出拡大がもたらした沿岸漁業における構造変化とその課題 - 青森県と山口県におけるナマコの対中国輸出を事例として -。漁業経済研究，51(1)，43-64，(2010)
- 8) 濱田武士：輸出拡大に伴う多獲性魚の需給構造の変貌。漁業経済研究，53(2)，67-83，(2008)
- 9) 農林水産省：平成19年度農林水産物貿易円滑化推進事業のうち品目別市場実態調査（結果）。 http://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/h19_zigyoku/enkatsu/market/index.html
- 10) 財務省：財務省貿易統計。 <http://www.customs.go.jp/toukei/index.htm>
- 11) FAO：Yearbook of Fishery Statistics Summary tables. commodities 2009。 <ftp://ftp.fao.org/fi/stat/summary/alybc.pdf>
- 12) FAO：FishStatJ。 <http://www.fao.org/fishery/statistics/software/fishstatj/en>
- 13) 農林水産省：東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う各国・地域の輸入規制強化への対応「諸外国・地域の規制措置」。 http://www.maff.go.jp/j/export/e_info/pdf/kensa_0120.pdf
- 14) 湊文社；地域資源に新天地を拓く アクアネット 2月号 34-37，(2011)